

「パリにおける近代建築の改修事例に関する意匠考察」

— 2005 年度現地調査報告書 —

首都大学東京

都市建築ストック賦活更新研究センター

三田村 哲哉

■はじめに

我が国は大変優れた歴史的建造物の保存技術を有しているが、一般的な近代建築の改修は未だ日本社会の信用をほとんど得られていない。また近代建築の改修に関する意匠研究も非常に乏しく、建築家もその手法を習得できていない。その最大の原因は近代建築の改修を強く推奨できる秀逸な作品に関する考察の量的不足と、日本社会に広く紹介することのできる事例集などのデータベースの整備が大きく遅れていることにある。

一方、西欧の建築は近代以前から修復・改修が繰り返されてきた。その中でもフランスは建築改修の大変厚い蓄積を有している。例えばパリには中世に建設された3棟の邸宅が現存しており、そのひとつサンス館 (Hôtel de Sens) は現在フォルネー図書館 (Bibliothèque Forney) として利用されている。サンス館は元々 1292 年に大司教の邸宅として建設された建築を基に、1475 年から 1519 年にかけて当時パリ一美しいフライボワイヤン様式の宮殿に改修された。1622 年に大司教館が新築されると、1689 年から 1743 年には倉庫、馬小屋、その後缶詰工場、ジャム工場、ガラス工場と転々とする。1911 年にパリ市が買取りフォルネー図書館を開館してから、1936 年から 1962 年にかけて改築工事が実施された。その結果、現在の正面 (portail)、小塔 (tourelles)、天守閣 (donjon) が保存されたのである。フランスはこうした歴史的価値の高い建築も大胆な増改築や用途の転用にも躊躇うことがない。

パリの建築改修は 19 世紀および 20 世紀に建設された近代建築にも受け継がれている。こうした動向は 20 世紀に入ってから歴史的記念建造物 (Monuments Historiques) などの積極的に制定された建築保存制度により強化され、パリは多数の魅力的な建築が点在する美しい街に発展したのである。こうした建築保全の歴史的背景、歴史的建造物の保存手法、建築保存制度に関する研究はすでに始まっており、ある一定の蓄積がある。しかしパリの近代建築が具体的にどのような改修を施されてきたのか、という各作品に関する意匠研究は依然として乏しい状況にある。



図-1 フォルネー図書館

本研究はこうした我が国の建築改修に関わる背景とパリの建築改修に関する研究蓄積を鑑み、以下の2点を試みる。第一にパリにおける近代建築の改修事例に関する意匠考察を行い、改修の経緯とその手法を明らかにする。第二に建築改修の認知普及を広く促すことのできるデータベースを構築する。

こうした優れた事例は今年度フランス主要建築雑誌から収集した量と質からも明らかである。評価の高い事例はフランス主要建築雑誌 *L'Architecture d'Aujourd'hui* 誌、*Technique et Architecture* 誌、*Le Moniteur Architecture* 誌の3誌から選出した。全誌 1990 年 1 月号から 2004 年 12 月号までを対象として、増築をともなった事例も含めて建築改修が実施されたすべての作品を抽出した。その結果収集した事例は 140 例を超えたのである。まず始めに全事例から「住宅への改修」17 事例と「ZAC (協議整備区域) を対象とした」4 事例を除外した。さらに改修前の建築用途と改修後の建築用途に着目しながら、「建築用途の変更をともなった」43 事例、「建築用途の変更をともなわない」72 事例、「大規模な増築をともなった」16 事例にそれぞれ分類した。

本研究では今年度「建築用途の変更をともなった」43 点の改修事例の中から、建築用途が大きく変化した事例 17 点を対象に、2005 年 11 月 25 日から 12 月 8 日まで現地調査を実施した。本報告書はその成果をまとめたものである。

1. フランス文化庁

—外観の一体化—

百貨店倉庫 (1919) + 集合住宅 (1960) → 官庁 (2004)

建築家：フランシス・ソレル (Francis Soler)

フレデリック・ドルオ (Frédéric Druot)

設計競技：1995年、工期：2000年-2004年12月

規模：延床面積 28,643 m²

1995年にフランス文化庁の建築のコンクールが開催された。2000年に1等を獲得したフランシス・ソレルとフレデリック・ドルオは、コンクールの提案に沿って建設年代の異なる2棟の建築を連結しながら、建物全体に改修を施す建築工事を着工した。

サン・トノレ (rue St. Honoré) 通りに面した1棟は、元々1919年に建築家ヴォードワイエ (Vaudoyer) によって設計されたルーヴル百貨店の商品倉庫であり、当時の斜線規制に倣い6階以上の立面に特有の装飾を伴った開口部が設けられている。一方モンテスキュー通り (rue Montesquieu) とクロワ・デ・プティ・シャン通り (rue Croix des Petits Champs) に面してL字型に建設されたもう1棟は、1960年に建築家オリヴィエ・ラル (Olivier Lahalle) が設計した集合住宅であり、ルーヴル百貨店の商品倉庫とは異なる鉄筋コンクリート造によって建設された。両棟は建設年代が異なるため、立面の表情が異なるだけでなく、1930年代にパリ市内の建築に対する斜線規制の改定が施行された影響を受けて、上層階の立面もそろっていない。

フランシス・ソレルとフレデリック・ドルオは両棟の一体化を試みるために、商品倉庫の6階以上の開口部を除くすべての立面に、1524-1530年に建設されたイタリアルネッサンスの巨匠ジュリオ・ロマーノ (Giulio Romano) 設計のアントヴァンのテ宮殿 (palais du Tè de Mantoue) にアイデアを得た6種類のモチーフのパネル450枚を、シルバーの蜘蛛の巣が覆い被せられたように張り巡らした。一方内部空間は2棟に囲まれた中庭を中心に、階高が異なるため、階段によってレベル差を調整しながら、450の事務室、図書室、ホール、カフェテリア、レストランが計画された。

パリは100年以上に渡り、装飾や開口部などの外観を考慮しながら、都市建築に対する斜線規制を設けて、周囲の建築との調和を尊重してきたため、従来の建築はこうした規制に配慮したものとならざるを得なかった。しかしフランス文化庁はこうした従来の建築操作とは異なる新たな立面操作を積極的に採用することによって、建設年代と様式の異なる2棟の建築を内部空間だけではなく、外観の一体化を試みた大変興味深い作品である。



図-1 計画案 鳥瞰図

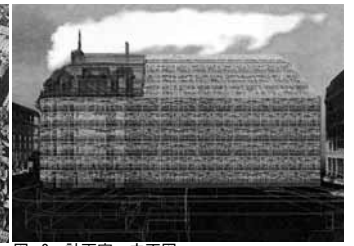


図-2 計画案 立面図



図-3 旧ルーヴル百貨店商品倉庫側のファサード



図-4 1960年の都市建築



図-5 立面傾斜の差異



図-6 2棟の継ぎ目部分。



図-7 パネルのディテール



図-8 1階平面図



図-9 オフィス階平面図

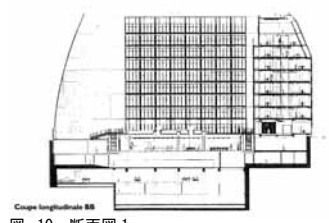


図-10 断面図1



図-11 断面図2

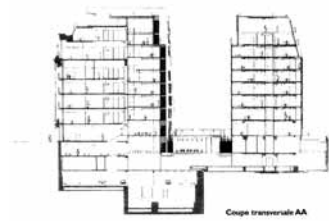


図-13 断面図3

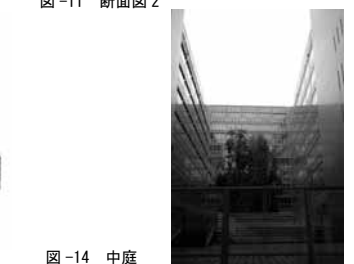


図-14 中庭

2. ジャン＝ポール・ゴルチエ本社屋 ー内に秘めた建築の象徴性ー

共済組合本部（1912）→モード本社（2004）

建築家：アラン・モアッティ（Alain Moatti）

アンリ・リヴィエール（Henri Rivière）

工期：2003年5月-2004年6月

規模：延床面積約 4,700 m²

1912年に建築家ベルナル＝ガブリエル・ベレスタ（Bernard-Gabriel Belestá）によって設計された共済組合本部（Palais de la Société Mutualiste）は無残にも荒れ果てていた。ジャン＝ポール・ゴルチエは2004年7月この廃墟を買取って、全面的に改修し本社ビルとしてのである。設計者のアラン・モアッティとアンリ・リヴィエールはファッションショー・ルーム、事務所、試着室、アトリエを設けるために、地下1階、地上6階、全延床面積 4,700 m²に及ぶ改修工事を実施した。

旧共済組合本部はサン＝マルタン通りに面して（rue Saint-Martin）間口が狭く、奥行きが長い建築であり、さらに両側に隣接した建築によって自然採光が非常に乏しい。しかし1階の天井高が高いので、ガラスの大型扉に面した細長い中庭から採光と通風を確保し、さらに鉄骨造のスラブを新設することによって、1階だけではなく2階にも事務室・サロンが設けられた。

一方3階のファッションショー・ルームは元は共済組合会員の集会場であったため、前面ファサードに面した大空間のホワイエが併設されており、無機質な1階や2階とは全く対照的である。当時の装飾を伴ったショー・ルームはホワイエも含めて長さ 60 m、幅 14 m、高さ 11 mを誇り、3箇所の天窓から自然光が取り入れられ、両側面の天窓と対を成す擬似開口部は、写真などを飾るための額縁となった。また黒く美しい手すりをもなったホール両側のギャラリーは、ファッションショーの際の客席にもなる。さらにショー・ルームを広く見せるために、床には壁や天井とは対照的に艶のある黒色の合成樹脂製の建材が採用された。こうした近代初期の建築の魅力を活かした印象的なショー・ルームはジャン＝ポール・ゴルチエのトレードマークとなり、WEB SITEなどのモチーフとしても利用されるようになった。

ジャン＝ポール・ゴルチエ本社屋は3方を外壁面によって囲まれた極めて敷地環境の悪い建築であるが、多様な建築プログラムの要求と機能を満たすことに成功しただけではない。さらに正面ファサードも閉ざすことによって、一度廃墟となった閉鎖的な建築の内部に、ジャン＝ポール・ゴルチエの独特な美的感覚を象徴させた大変魅力的な作品である。



図-1 正面ファサード 写真



図-2 ファッションショー・ルーム

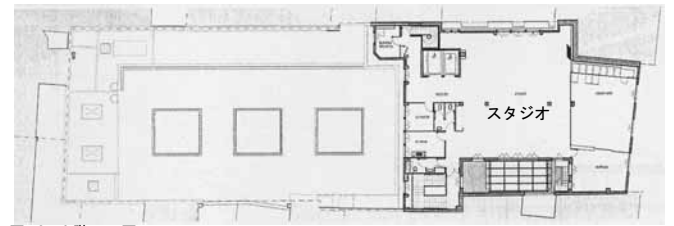


図-3 6階平面図



図-4 1階平面図

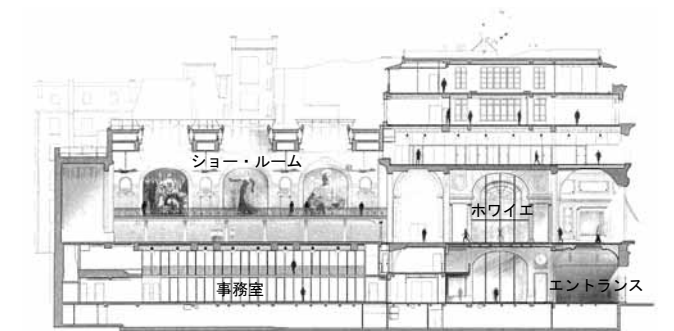


図-5 断面図1

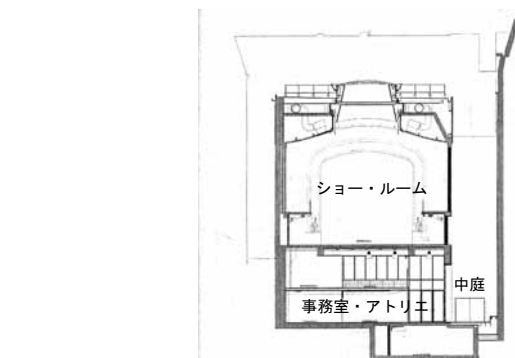


図-6 断面図2

3. パヴィリオン・ド・ラルスナル —新たな鉄のインテリア—

美術館 (1878) → . . . → 展示施設 (2001)

建築家：フィリップ・シモン (Philippe Simon)

工期：— 2001

規模：床面積約 1200 m²

1878年にローラン＝ルイ・ボルニッシュ (Laurent-Louis Borniche) は自らのコレクションである約 2,000 点の絵画を市民に公開するため、建築家クレマン (Clément) に依頼して美術館を建設した。施主の死後、美術館にはパスタメーカーのリヴォワール・エ・カレ (Rivoire et Carret) が入居したが、その後飲み屋、レストランと転々とした。1922年にサマリテンヌ百貨店が購入し、1931年に既製の服のアトリエを開業したが、1954年にパリ市に転売されアーカイブとして利用されていた。

パリ市は 1988年に展示施設、図書館、事務所に転用するため、改修工事をライヘン・エ・ロベール (Reichen et Robert) に委ねた。その結果元々美術館であった建築が 3,330 m²を有するパヴィリオン・ド・ラルスナルに生まれ変わったのである。さらに 2001年にフィリップ・シモンは 1階展示室を中心に 1,200 m²に渡って現代的な建築操作を実施した。

鉄骨造 2階建のパヴィリオン・ド・ラルスナルは展示室の中央に大きな吹抜けと天窗を有した近代初期の代表的な鉄骨造建築であり、内部空間は 1階の天井高を抑えつつ、2階の天井高を高く構成されていた。したがって建設当初美術館であったパヴィリオン・ド・ラルスナルの内部空間と開口部は今日に至っても有益であることには変わりなかった。そのためフィリップ・シモンは 19世紀末特有の外観を保存しつつ、内観の鉄骨造による印象をさらに強調するため、1階の展示室を床・壁・天井を一枚の鉄板で包み込むという、現代的で大胆な建築操作を試みたのである。

パヴィリオン・ド・ラルスナルは 19世紀後半の代表的な鉄骨造建築の魅力をより一層強調するために、床、壁、天井にも鉄材を展開することによって、鉄の印象や感触を内部空間に浸透させるという、新たな室内意匠の可能性を試みた作品である。



図-1 正面ファサード



図-2 1階中央吹抜



図-2 2階天井見上げ



図-3 1階 中央吹抜

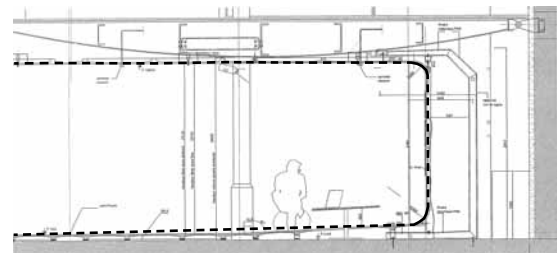


図-4 断面詳細図



図-5 平面図

4. 芸術家アトリエ

ー建築保存運動ー

工場 + 作業場 (1900) → 芸術アトリエ (2002)

建築家：フィリップ・プロスト (Philippe Prost)

工期：1995年 -、2000年2月 - 2002年10月

規模：延床面積 1,255 m²

パリ 20 区のベルヴィル通り (rue de Belleville) とデノワイエ通り (rue de Dénoyez) が交差した一街区の中心に、周囲の街の発展から取り残された旗竿型の敷地がある。1900 年に機械部品製造工場 (usine) 1 棟と作業場 (atelier) 2 棟が竣工したが、第二次世界大戦末に機械部品工場が移転したため、残された工場建築はガレージとして、作業場は部品加工施設に転用された。しかし 3 棟はその後街区の中心に放置され続けたのである。

そのためランポノー・ベルヴィル市街化規制地域 (ZAC Ramponeau-Belleville) に基づいて、旧工場と旧作業場を取り壊し、土地を分割して道路を通す計画案が浮上した。しかしこれら 3 棟は芸術家に占拠され、さらに取り壊しに対する不法居住者の反対運動が市民の支援を受けて、芸術家と不法占拠者による協会組織ラ・フォルジュ・ド・ベルヴィル (La Forge de Belleville) が結成された。

こうした状況を受けてランポノー・ベルヴィル市街化規制地域の計画案は 1995 年 9 月に取り下げられ、ラ・フォルジュ・ド・ベルヴィルはパリ市と協議を続けた。その結果パリ市は 3 棟を半年から 1 年間をめぐりに芸術活動を行うためのアトリエに転用すること認め、この地域一帯の改善とともに、改修計画を建築家ジャン＝ピエール・フーガ (Jean-Pierre Feugas) に委ねた。

ジャン＝ピエール・フーガはフィリップ・プロストの調査結果を受けて、旧工場と旧作業場の保存に関する検討が始まった。工場の鉄骨造の屋根組は保存するが、屋根瓦とガラス材は取り替える。屋根面は 2 重にするとともに白く塗装し、元の建物と同様に自然光豊かな空間とする。また内部空間の仕切り壁は金属レールによって自由な空間に変更できるように計画された。一方作業場の立面は余分な要素を取り除きながら修復し、戸は建具と共に保存するというものであった。しかし作業場の状態は非常に悪く、保存が困難な状況にあり、近いうちに建

替えが必要と判断された。したがって旧作業場は今日の建材、亜鉛メッキ鉄骨、煉瓦を用いながら、旧作業場に倣って再建する方法が検討された。

我が国では明らかに建替えを検討する建築であっても、市民とともに専門家による検討を交えながら、保存すべき建築は徹底的に保存し、建替えを要する建築は建て直すという検討の手続きに参照すべき点が多い。



図-1 旧工場棟
鋸型屋根の構造体はかろうじて残っている。



図-2 旧工場棟
鋸型屋根の開口部と屋根瓦。



図-3 工場棟と作業場



図-4 作業場

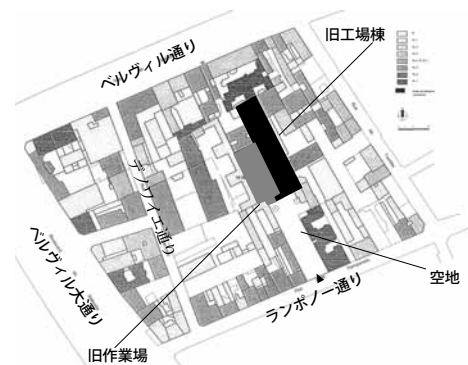


図-5 配置図

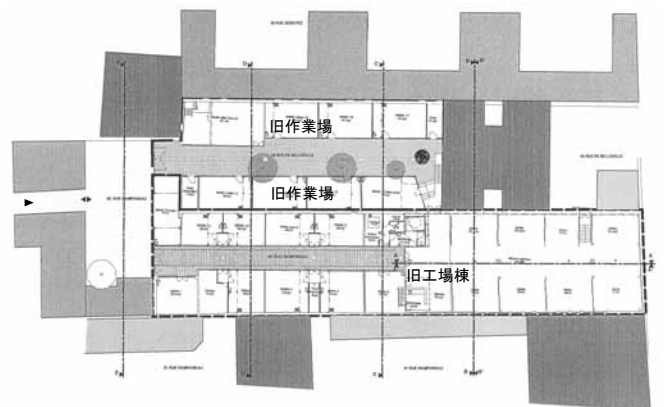


図-6 平面図

5. スプレイ Spray

—古典とポップ?—

音楽劇場 (19世紀) →・・・→事務所 (2000)

建築家：カール＝フレデリック・スヴェンステッド
(Carl-Fredrik Svenstedt)

工期：2000年1月-2000年3月

規模：第1期延床面積 900 m²、1,500 m²、引渡しされた渡しされた面積は 2,000 m²

スウェーデンのインターネット企業スプレイのフランス支社は、パリ2区のポール・ルロン通り (rue Paul Lelong) に面した19世紀のネオ・ルネサンス様式の建築に入居した。この地域はパリのスペクタクルの伝統の地であり、スプレイが入居した建築もその例外ではなかった。しかし最上階のリサイクルホールは、20世紀初頭に鉄骨の柱梁と木造のスラブが2層に渡って新設され、事務所等に転用されたという。

そのため設計者カール＝フレデリック・スヴェンステッドはこうした構造体の枠組みを考慮しながら大胆な改修を実施した。スプレイは設計者に対して住宅のような快適なオフィス空間を要求したため、通常オフィスにはないジム、サウナ、シャワー、タバコ・ラウンジ、読書室、キッチン、ダイニング・ルーム、ソファールームが新たに設けられた。2000年1月から3月までの第1期工事では、まずはじめにリサイクル・ホールを中心に、900 m²のオフィスの改修が進められた。

リサイクル・ホールでは既存の床スラブと柱梁を避けながら、オフィスフロアの中央に鉄骨階段を新設して、元々リサイクル・ホールであった上階3層を連続させた。オフィス空間は中心のオープン・スペースとその周辺の個人のスペースから構成されている。また各階のオフィスは合わせてデザインされたデスク、書棚、ソファ等によって有機的なつながりを持たせながら分節され、各階はバラ色、ユリ色、黄色に塗り分けられた。

スプレイ・フランス支社は19世紀に建設されたリハーサル・ホールの特有の建築空間を尊重する、現代建築特有の階層間のつながりを向上させ、さらにポピュラーなインテリアデザインを挿入することに成功した優れた作品である。



図-1 正面



図-2 最上階



図-3 オフィス階



図-3 断面図

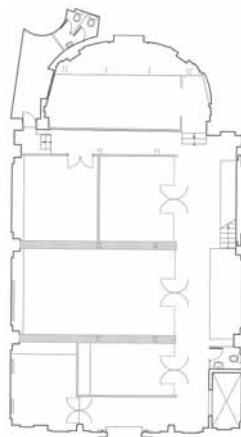


図-4 改修前の平面図

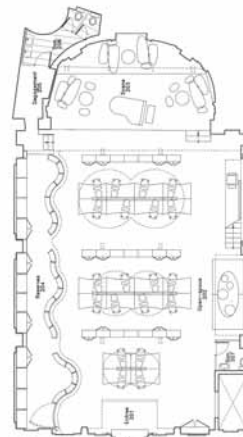


図-5 改修後の平面図



図-6 改修前の平面図



図-7 改修後の平面図

6. プティ・カフェ・ジョンヌ

－外観と内部空間の対比－

エントランス→・・・→カフェ (1998)

建築家：クリスチャン・ベッヒャー

(Christian Biecher)

工期：1997年-1998年、1-2ヶ月

規模：述床面積 22 m²

ホテル・ド・レ (Hôtel de Retz) のプティ・カフェ・ジョンヌ (Le Petit Café Jaune) はパリ 3 区のフランス国立古文書館 (Archives Nationales) の近郊に位置する。このカフェは元はホテル・ド・レのレジデンス棟のエントランスであったので、1階の前庭と中庭に面しており、周囲には開放的な空間が広がっている。カフェの面積は 22 m² と非常に狭いが、隣の小さな店舗が L 字型に併設されるとともに、カフェへのアクセスがエントランスからのほかに、レジデンス棟からも可能であるため、空間の連続性が非常に高い。

インテリアデザインが得意の設計者クリスチャン・ベッヒャーは、外壁の室内側の壁面に高さ 2,300mm の黄色の箱を設置した。この箱の内側に照明等の電気設備が収められており、天井工事を行うことなく間接照明によって外観とは対照的な柔らかい空間を演出した。さらに 5 組のテーブル、椅子などの家具とともに、インテリア全体が店の名前の通り黄色に統一され、その効果をより一層高めている。こうしてインテリアは縦長窓、コーニスなど外観に見られる洋式建築の特徴とは対照的に、ポップな空間が演出された。

プティ・カフェ・ジョンヌは周辺環境の良い洋式建築の一角に、全く対照的な現代的なインテリアデザインを挿入することに成功した点が高く評される作品である。



図-2 内観



図-3 中庭

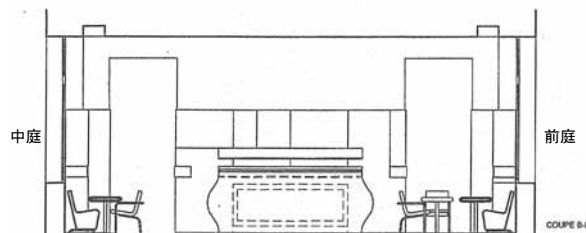


図-4 断面図 1



図-5 断面図 2

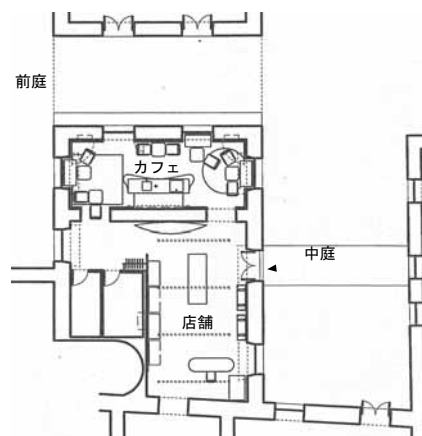


図-6 平面図



図-1 前庭

7. 映画館

—表と裏—

展示施設 (1878?) → . . . → 映画館 (1996-)

建築家：フレデリック・ノミュール (Frédéric Namur)

工期：1996-

規模：延床面積 2,600 m²

1872年にパリ万国博覧会において食料品を展示するために、シャン・ド・マルスに計画された産業宮の付設ギャラリーが考案された。鉄骨造のギャラリーは1880年にラヴィレット池岸 (Bassin de la Villette) に移築され、ボート用倉庫に転用された。1996年にその倉庫が映画館を中心とした複合施設に改修されたのである。

建築家フレデリック・ノミュールは鉄骨造建築の高い天井高と地下空間を利用しながら、断面を巧みに計画することによって、全1,000席、全6室を有する映画館、レストラン、展示施設からなる複合施設を計画した。

倉庫として利用されていた鉄骨造の構造体は、屋根及びラヴィレット池岸側だけを保存し、その他の部分は全く新しく現代建築に作り変えられた。その結果ラヴィレット池側の立面は細長い鉄柱と5m突出した鉄骨のキャノピーが展示館のように保存されたが、反対側の立面は現代建築のようなガラス張りの立面に建替えられ、対照的な表情を有している。

保存すべき箇所と改築すべき箇所を明確に区別し、それぞれを組み合わせることによって、限られた空間に複雑な建築プログラムを挿入することに成功し、対岸にも同様の鉄骨造建築を同じような施設が改修された。



図-1 ラ・ヴィレット池岸側外観1



図-2 セーヌ岸通り側外観2



図-3 ラ・ヴィレット池側外観3

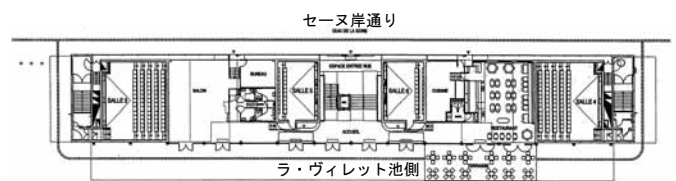


図-4 1階平面図

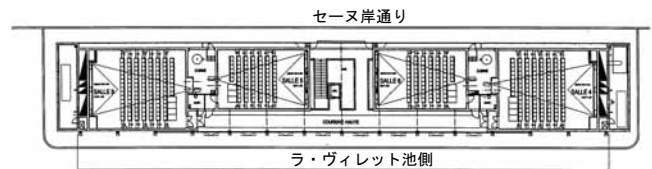


図-5 2階平面図

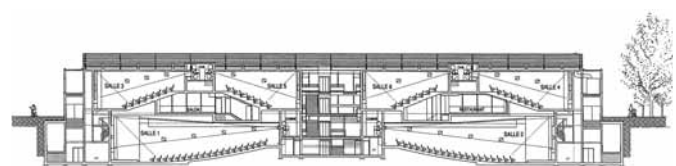


図-6 断面図

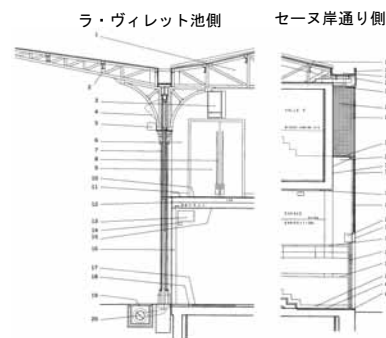


図-7 詳細図



図-8 キャノピー

8. 鉄道高架橋下店舗

—産業遺産の建築化—

鉄道高架橋（1859）→店舗（1995）

建築家：パトリック・ベルジェ（Patrick Berger）

設計競技：1988年、工期：1993年-1995年

規模：—

1859年に竣工した鉄道高架橋はパリ12区のドメニール大通り（Avenue Daumésnil）に1.4キロに渡って面している。高架橋と67に及ぶヴォールトが放置されていたため、1988年に有効利用を求める建築コンクールが開催された。

当選した建築家パトリック・ベルジェの提案は商業施設の挿入であり、1995年にヴィアデュク・デ・ザール（Viaduc des Arts）が設計された。ヴォールト天井は高さがあるため、2階床を取ることができるほか、地下空間を利用することによって3層の床面積を確保できる。またそのほかの店舗の中には、3つのヴォールトに通路を通して、より広い店舗が建設された。

ヴォールト天井の両側はガラス張りであるため、内部空間は非常に明るく、1階床に開口部を設けることによって、地下1階にも自然光を取り入れることが可能である。またヴォールトは構造体である石が露出し荒々しさを残して仕上げられているが、こうした石造の躯体とは対照的に、現代的なインテリアデザインが積極的に挿入された。



図-1 旧鉄道高架橋1 側面



図-2 旧鉄道高架橋2 正面



図-3 店舗内観1



図-4 店舗内観2

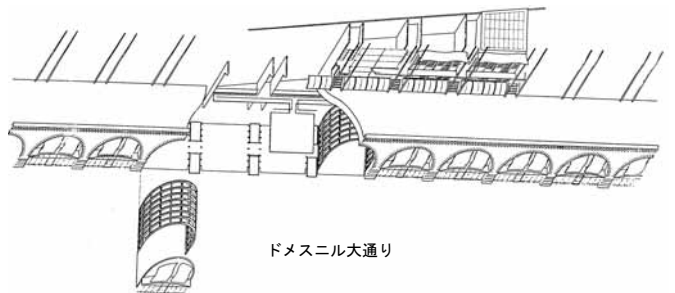


図-5 アクソメ

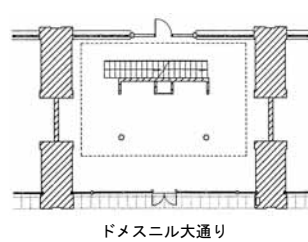


図-6 1階平面図

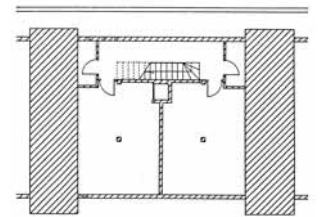


図-7 地下1階平面図

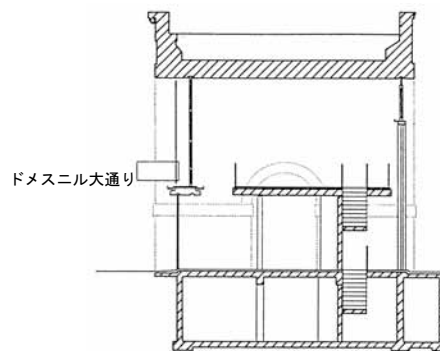


図-8 断面図

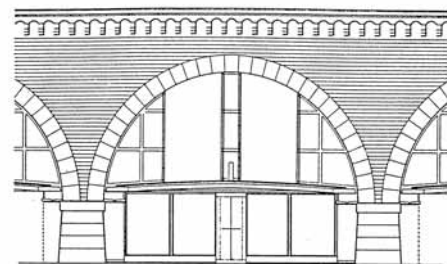


図-9 立面図

9. パサージュ

－外観の保存と新たな空間の挿入－

パサージュ（1829）→・・・→大学+協会（2004）

建築家：ドミニク・ピノン（Dominique Pinon）、

パスカル・カパリス（Pascale Kaparis）

工期：2003年-2004年

規模：延床面積 22,805 m² S

パリ2区のギャラリー・コルベール（Galerie Corbert）は南側をプチ・シャン通り（rue des Petits-Champs）に面して、西側をヴィヴィエヌ通り（rue Vivienne）に面して建設された。

1829年にJ.ビヨ（J. Billaud）によって建設されたギャラリー・コルベールは当時1階の店舗に加えて住宅が3層に渡り設けられていた。1980年代の初めに隣接するフランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）の書庫部門拡張を見込み、ギャラリーは一度解体し再建が計画された。1990年L・ブランシュ（L. Blanche）の再建工事にともない、10mから17mに拡張された中庭を二分するように新たな建物が増築され、中庭が住宅階に開放された。また6箇所に縦動線が新設されるとともに、地下1階には劇場が、地下2階にはインフラが整備され、総面積20%の増築をともないながらギャラリー全体の再構成が実施された。

フランス国立図書館と国立美術史研究所（Institut National Français d'Art）による協議の結果、ギャラリー・コルベールは本研究所とパリ大学を中心に展開することとなる。その計画は次の3点から構成された。第一は本研究所の中心部となる、受付、展示、店舗、劇場などが設けること。第二は本研究所及び関連機関の管理・運営部門の研究室、資料室、作業室、セミナー室が設置すること。第三は本研究所参加機関の研究室、資料室を新設することであった。

パサージュは徹底的に保存改修が施される一方、増改築が加えられた周囲の建築群には、シークエンスを取り入れた空間が各所に積極的に挿入された。つまりフランス近代初期を象徴するパサージュの独特な空間を保存するだけにとどまらず、さらに現代建築特有の空間を積極的に挿入することに成功した優れた作品である。

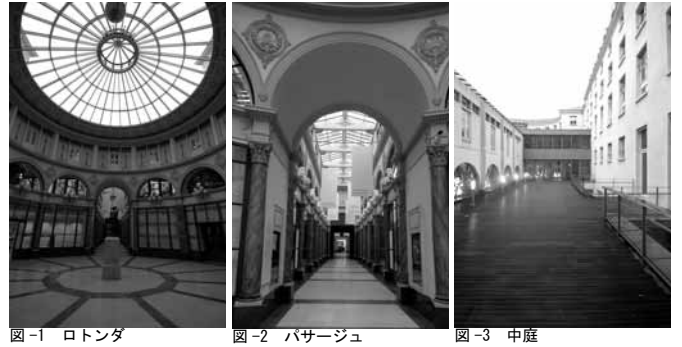


図-1 ロトンダ

図-2 パサージュ

図-3 中庭



図-4 増築された2階

図-5 増築された2階

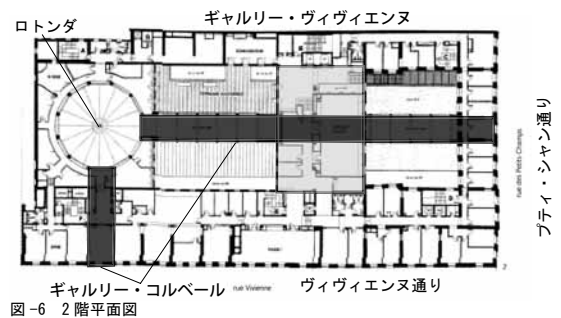


図-6 2階平面図

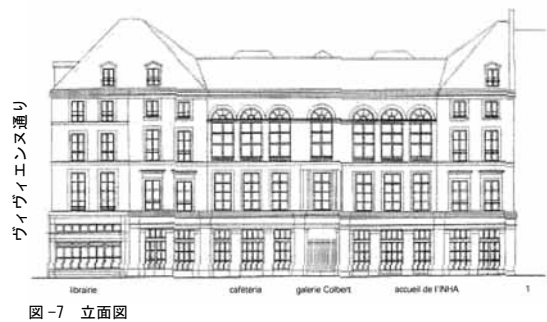


図-7 立面図



図-8 断面図

10. フランス極東学院・アジア館一連結建築一

個人住宅（1886）+ 建物（1920 s）→大学施設（1994）

建築家：アルベール＝ジル・コーエン（Albert-Gilles Cohen），ルイ・ゲ（Louis Guedj），ドニ・ランギヤール（Denis Lengart）

工期：1993年1月-1994年7月

規模：延床面積約 3,400 m²

フランス極東学院（Ecole Française d'Extrême-Orient）のアジア館（Maison de l'Asie）は2棟の建築を連結したものである。1棟はウィルソン大統領通り（Avenue du Président Wilson）に面した1886年竣工の石造個人邸宅であり、もう1棟はロンシャン通り（Rue de Ronchamp）に面して1920年代に竣工した建築家（構造家）フランソワ・エネビック（François Hennebique）設計のコンクリート造建築である。

フランス極東学院は研究拠点を集約するために、アジア館を研究機能だけでなく研究成果の公開機能を兼ね備えた施設にすることを要求した。改修を担当したアルベール＝ジル・コーエンらによる計画案は研究室、受付、会議室、事務室、図書館からなり、外観は周囲の建築との調和を重視して保存され、内部は柱梁及び床の構造補強が実施された。本改修工事ではウィルソン大統領通り側の建築には研究センターと会議室を、ロンシャン通り側の建築には図書館を集約し、2棟の建築の間に設けられていた中庭の両側に通路を設けて2棟を連結した。

両建築ともに建蔽率いっぱいであったため、識者の意見を考慮して、中二階にはパティオが増築された。最も魅力的な空間は図書館と2棟の間に設けられたこのパティオである。そのためアジア館は通りに面したファサードからだけではなく、2棟の狭間に設けられたパティオからも自然光が取り込まれる。

図書館は1階だけではなく、2階も楕円形天窓を有した階高の高い閲覧室に改修され、地下1階から地下3階には書庫が設けられた。図書館2階の閲覧室の高さはウィルソン大統領通り側の建築2階に合わせることで、両棟はそれぞれ階高が異なるが、2階のみ合わせることが可能であった。この事例は研究センターと図書館をそれぞれの建築に割り当てただけのようである

が、中庭に動線とパティオを設けながら時代の異なる建築の空間を連続させることによって、機能面だけではなく、建築の裏側となっていた部分により魅力的な空間を用意することが可能となった。



図-1 各階平面図。左側がロンシャン通り、右側がウィルソン大統領通り。



図-2 ロンシャン通りの立面 図-3 ウィルソン大統領通りの邸宅の立面 図-4 図書室とパティオ



図-5 パティオ

図-6 図書室

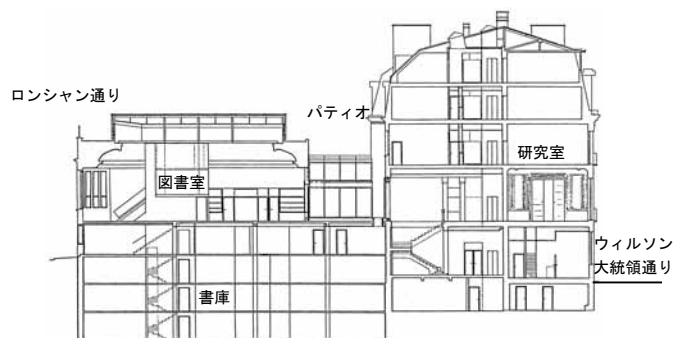


図-7 断面図

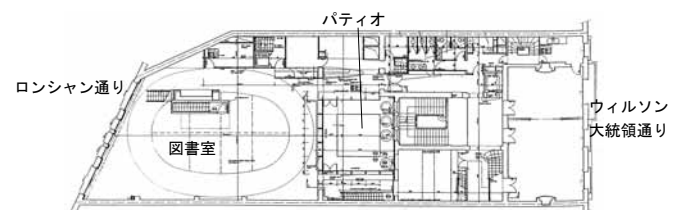


図-8 平面図

11. 薬物中毒患者センター

—大空間の転用—

工場（1930）→医療施設（1994）

建築家：ジェイド・エ・サミ・タベ（Jade et Sami Tabet）

工期：1994年1月-1994年9月

規模：延床面積 725 m²

薬物中毒患者センターはパリ 18 区のフランス国鉄 SNCF の線路際の一角に、1930 年に鉄骨造アスベスト入りセメント板を外壁に用いて建設された 2 階建ての大型倉庫を転用したものである。建築家ジェイド・エ・サミ・タベはこの施設がその性質上、パジヨル通り（Rue Pajol）から空間の断絶を必要とするが、独立した自治とアイデンティティを重視する改修計画を提案した。

センター全体は中庭を取り囲むようにコの字型に構成され、開口部が設けられている大屋根の中庭部分のみ屋根根を取り払い、パジヨル通り面した中庭のみを開放的な外部空間となるように計画された。1 階にはカフェテリア、ホワイエ、シャワー、トイレなどの共有する各諸室が設けられ、2 階には各患者用の個室が並べられた。安全を考慮してパジョ通り側の開口部はハイサイドライトであり、中庭に面した大型の門は背の高い縦ざんである。

閉鎖的な工場建築の一部に、通りに面して開放的な外部空間を設けることによって、より一層閉鎖的でありながら外界と一部つながった施設に転用することに成功した事例である。

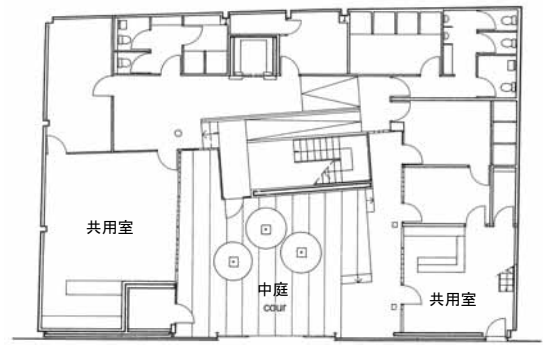


図-5 1階平面図



図-6 2階平面図

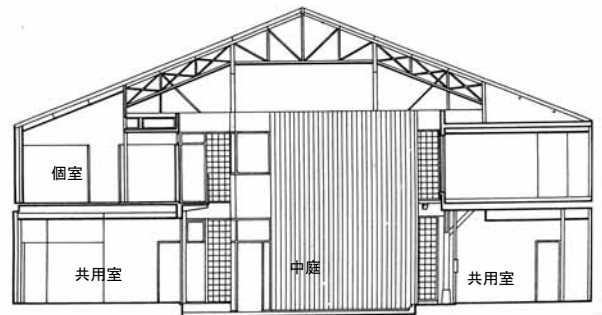


図-7 断面図



図-1 パジヨル通りのファサード



図-2 中庭上部



図-3 中庭1



図-4 中庭2



図-8 中庭3 階段室



図-9 正面

12. フナック・エトワール

—装飾の保存と動線の拡充—

百貨店（1912）→量販店（1991）

建築家：アルシトラル（Architral）

工期：1990年11月-1991年11月

規模：延床面積 15,346 m²

フナックは1912年に建築家マルセル・ウダン（Marcel Oudin）によって設計された鉄筋コンクリート造の百貨店を改修して新店舗エトワールを開店した。テルヌ大通り（Avenue des Ternes）に面した新店舗の設計は、建築設計事務所アルシトラルの建築家F.ペロン（F. Peron）とA.ダングレオー（A. Dangréaux）が担当したが、百貨店が歴史的建造物であったためフランス建築保護建築家（ABF: L'Architect des Bâtiments de France）も改修設計に携わった。アルシトラルはフランスの商業建築の内装設計を得意とした大手設計事務所であり、フランスにあるフナックの店舗設計はアルシトラルによるものが多い。

フナック・エトワールの新店舗の特徴は地下2階地上6階建てであり、地下1階から地上4階の売り場には大きな吹き抜けが設けられ、最上階を大きなガラス屋根が覆う。新店舗改修の基本方針は歴史的価値のある建築の完全な修復と、大量量販店として機能するための安全性の確保であった。完全な修復のひとつに売り場最上階の大きなガラス屋根の改修が挙げられる。大きなガラス面に設けられたステンドグラスはエコール・ド・ナンシー（Ecole de Nancy）の巨匠ジャック・グルベール（Jacques Gruber）の作品であり、その保全のために一度分解して部材の補修を行い、二重ガラスで挟み込み込んでから再び取り付けるといった徹底した工法が採用された。またこの百貨店は大規模な構造補強を要しなかったため、外装は外壁面の装飾を補修するだけにとどめることができた。そのため元々の象徴的な建築のファサードの魅力は、大通りの交差点に面して最大限に活かされた。

一方大型店舗の安全性の確保は、多量の来店者の動線確保が最大の課題であった。そのため吹き抜けの隣に地上1階から4階までをつなぐ17機のエスカレーターが新設され、1時間に18,000人を運搬する能力を有する。

外観と大きなガラス屋根には近代初期の建築の魅力を有し、内装には現代の大型店舗の機能と内装を取り入れたフナック・エトワールは歴史的価値のある建築の魅力を活かしつつ、新たな建築の機能を満たし、現代建築の魅力的なインテリアを取り入れた好事例である。



図-1 テルヌ大通りとニエル大通り交差点ファサード



図-2 正面ファサード テルヌ大通り側



図-3 吹抜

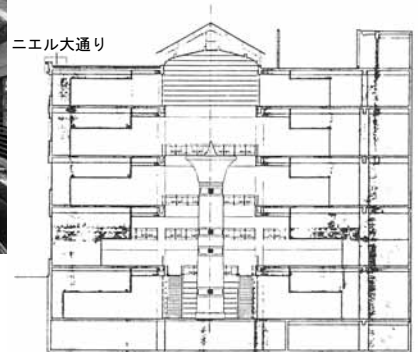


図-4 断面図1

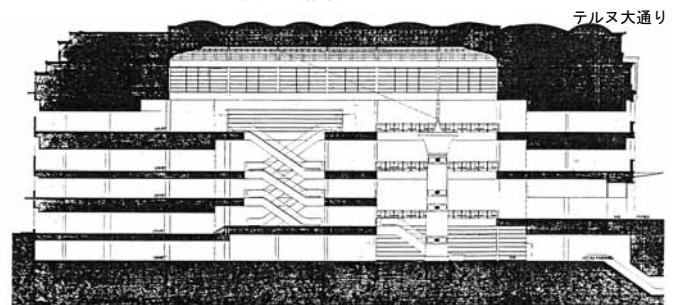


図-5 フナック・エトワール 断面図2

13. ウィルモット・オフィス

—中庭空間の有効利用—

集合住宅(?) → 建築設計事務所 (1991)

建築家: ジャン=ミシェル・ウィルモット (Jean-Michel Wilmotte)

工期: 1989年9月 - 1991年6月

規模: 延床面積約 事務所 1,000 m²、住居 500 m²

パリ 12 区の集合住宅が立ち並んだファウブール・サン=アントワヌ通り (Faubourg-Saint-Antoine) と Cr.J ヴィギューズ (Cr.J. Vigüés) との T 字路の正面に、ジャン=ミシェル・ウィルモットのオフィスがある。この境界の集合住宅は 1 階を中心に用途を転用しながら利用されている建築が多く、このオフィスも例外ではない。ウィルモットは数層から構成され、大きな開口部を持った集合住宅を、地下 1 階を設計室に、地上 1 階をショールーム、受付、会議室に、2 階及び 3 階を設計室に転用した。ガラス張りの 1 階正面からショールームと受付が一望でき、さらにその奥に会議室がある。

ガラスの屋根で覆われた会議室は、元はこの集合住宅の中庭であり、その中庭を内部空間に改修することによって会議室として利用している。2 階まで吹き抜けた会議室は、降り注ぐ自然光によって大変明るい。また 1 階から 3 階までをつなぐオフィスの主階段が、元々中庭であった空間に飛び出すように取り付いている。

一方、1 階の床スラブの各所にスリット状に開口部が設けられており、地下 1 階にも自然光が届くように工

夫が施されている。壁面の白、床のグレー、サッシ及び手すりは黒色に統一され、正面とは対照的な現代建築のインテリアデザインが採用され、現代美術のコラボレーターによる作品が各所に散りばめられている。

ウィルモット・オフィスは集合住宅のファサードを保存しつつ、中庭空間からの自然採光とシークエンスを取り入れた現代建築の空間構成を積極的に挿入し、さらにインテリアの詳細に至るまで綿密にデザインされた好事例である。



図-1 受付・ショールーム



図-2 エントランス



図-3 正面ファサード



図-4 通り側の床面開口部



図-5 階段室の詳細

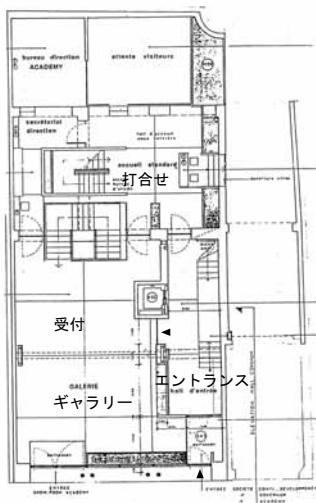


図-6 1階平面図



図-7 2階平面図

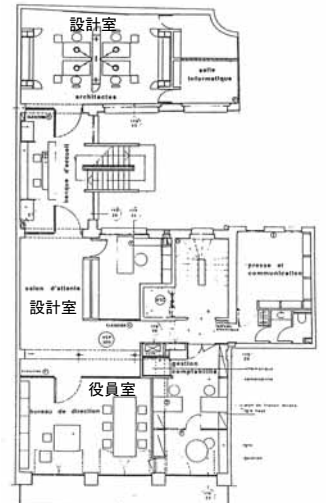


図-8 3階平面図

14. ギャラリー・ジュ・ド・ポーム

—シークエンスが挿入された洋式建築—

屋内テニスコート（1861）→・・・→美術館（1991）

建築家：アントワヌ・スタンコ（Antoine Stinco）

建築コンクール 1987年9月

工期：1989年9月-1991年4月

規模：延床面積 3,644 m²

1861年に建築家H. ヴィロー（H. Viraut）はチュイルリー庭園に“Jeu de Paume”というテニスの原型となったポーム球戯場を、オランジュリー（Orangerie）と軸線対称となる位置に建設した。全長80m、全幅13mを有するポーム球戯場は1909年に展示室に改修され、1922年には美術館に転用された。1930年までこの美術館はパリで活躍したモジリアニ、シャガール、ピカソ、ホアン・グリス、藤田など外国人の作品の展覧会に利用された。1947年にジュ・ド・ポム美術館（Musée du Jeu de Paume）が印象派の美術館として設立されると、1958年から新しい印象派の作品を展示するために、空調設備の他に自然光を取り入れる工事が実施された。しかしジュ・ド・ポム美術館は印象派の作品をオルセー美術館に集約するというフランス美術政策の影響を受けて、1986年にその役割を終えることとなったのである。

しかし新たな国立美術館に改修するために1987年に建築コンクールが実施され、アントワヌ・スタンコが選出された。設計の方針は建築が有する歴史の尊重と現代の建築が有する新たな特徴の付加であった。この建築は歴史的建造物であったため、フランス建築保護建築家の管理の下で改修工事が実施された。そして1991年6月に国立ギャラリー・ジュ・ド・ポム（Galerie Nationale du Jeu de Paume）が開館した。さらに2004年には3層に渡り9室の展示室が展開し、全展示面積1,137m²に上る現代美術館に生まれ変わったのである。

立面は一部に大型のガラス窓に映像を投影するなどの今日的な工夫は見られるが、ほぼ完全に保存された。一方内部空間は展示室、視聴覚室、店舗、カフェなど大小の空間によって再構成された。さらに国立ギャラリー・ジュ・ド・ポムは建築コンクール案のコンセプト「すべてをシンプルに」に倣って、内壁の色は白に統一される

とともに、自然光を取り入れながら、シークエンスが挿入された内部空間を有する建築に生まれ変わった。

国立ギャラリー・ジュ・ド・ポムは改修工事の方針に倣い、外観に歴史性の尊重を表現しつつ、内部空間には現代建築の特徴を積極的に取り入れることによって、両者の対照性を際立たせた作品である。

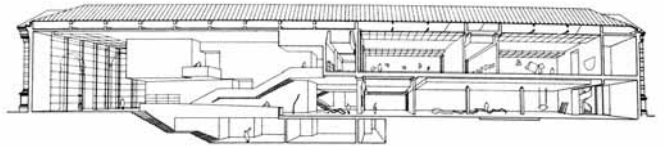


図-1 計画案 断面パース

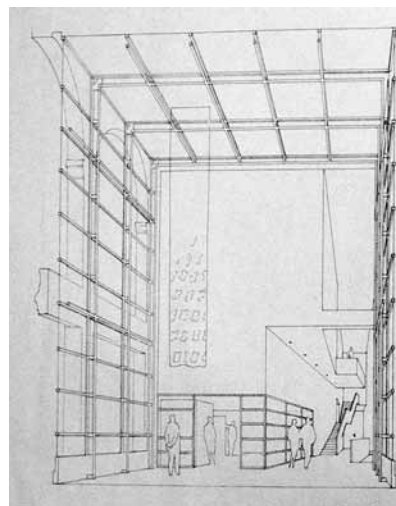


図-2 計画案 内観パース エントランス



図-3 正面



図-4 ガラスサッシ デテール



図-5 展示室に向かう階段室



図-6 1階平面図



図-7 4階平面図



図-8 北側立面図

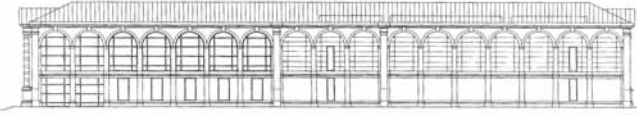


図-9 南側立面図



図-10 西側正面



図-11 東側立面図



図-12 断面図1



図-13 断面図2



図-14 断面図3

15. 郵便局

—内外一体の転用—

集合住宅（20世紀後半）→郵便局（1993）

建築家：ファブリス・デュサパン

（Fabrice Dusapin）、

フランソワ・ルクレール

（François Leclerc）

工期：1992年5月-1993年2月

規模：450 m²

郵便局は20世紀後半にパリ16区のロリストン（rue de Lauriston）通りに面して建設された集合住宅の1

階エントランス部分を転用したものである。本計画は1989年に郵政大臣ポール・キレス（Paul Quilès）による、集合住宅に郵便局を設置するという政策に基づいたものの一例である。

この集合住宅は中央に通り抜けられる歩道が設けられており、エントランスはその奥である。そのため郵便局のエントランス周辺は一番奥の窓口まで自然光が取り込めるように全面ガラス張りである。郵便局の事務室はロリストン通り側に集められ、窓口には天窓からの自然光が取り入れられている。

設計を担当した建築家ファブリス・デュサパン、フランソワ・ルクレールは待合室を広く取り、集合住宅の素材に合わせるために、建材の選択に苦慮したという。近年もう一棟の1階正面にも歩道をはさんで郵便局が増築された。

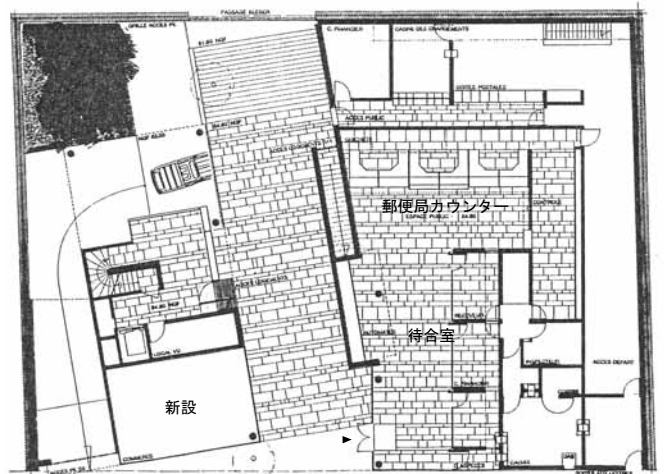


図-1 平面図



図-2 外観



図-3 外観 増築された棟



図-4 内観

16. ヴィトラ・ショールーム

－中庭の室内化－

集合住宅(1928)→・・・→ショールーム+オフィス(1990)

建築家：アントニオ・チッテリオ (Antonio Citterio)

工期：1989年7月-1990年5月

規模：800㎡

1990年5月、ヴィトラのフランス本社屋がパリ15区に竣工した。本社屋は1928年に建築家A.ドラクール(A. Delacourt) (施工者はE.パロ(E. Parot))によって設計された集合住宅の1階をオフィスに転用し、中庭をショールームに改修したものである。その総面積は800㎡に及んだ。

3棟の集合住宅の中庭に設けられたショールームは、元はオーディオ機器の部品倉庫であった。そのため、建築家アントニオ・チッテリオは次の3種の建築操作によって部品倉庫をショールームに甦らせた。ひとつは屋根をガラス張りに変更することによって、天井面から内部空間に自然光を取り入れたことである。

もう一つは中央に吹き抜けを設けるとともに、側面には軽快な階段を新設することによって、3層に渡る暗い倉庫を地上2階から地下1階まで自然光が降り注ぐ明るい展示空間に改修したことである。そのため現在地下1階にもショールームの他に事務室が設けられている。さらにショールームが元々倉庫であったコンテクストを記すために、壁面はすべて白に統一された。

さらに重要な建築操作は構造体を削減したことである。元がオーディオ機器の倉庫であったため1㎡あたり500kgの耐加重を見込んで柱が設けられていたが、家具のショールームに転用されるため、耐加重の軽減を見込んで、鉄骨柱を半分にまで削減し、ショールームとして利用できる広がりのある空間を確保することにも成功したのである。

多数建設されたパリの中庭型の集合住宅は、竣工後増築などによって中庭を侵食していったが、ヴィトラのショールームは採光条件の改善と構造体による制約の緩和によって、現代のギャラリーのような空間に甦らせ、元々倉庫であった薄暗い空間が今日世界で最も魅力的な家具を発信するショールームに転用されたのである。



図-1 正面

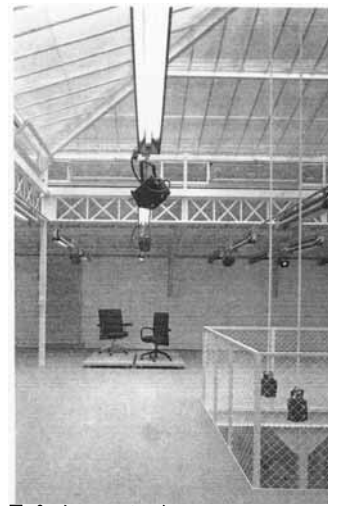


図-2 ショールーム

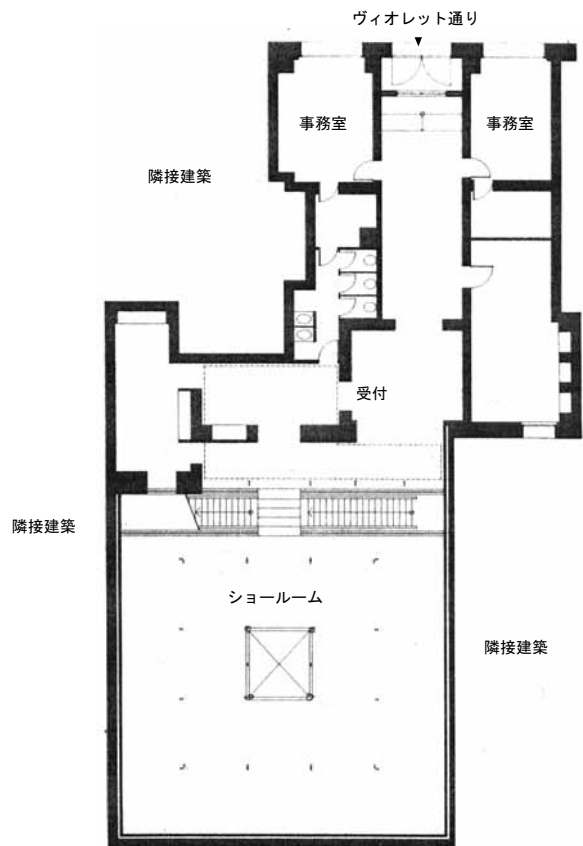


図-3 1階平面図

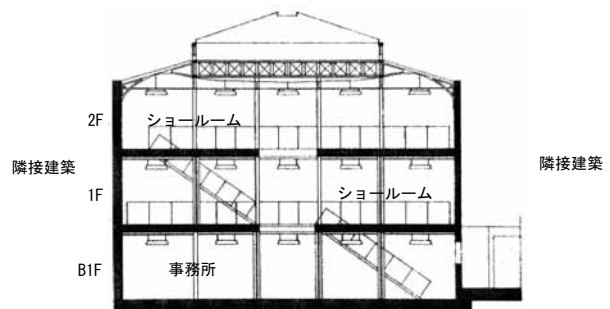


図-4 断面図

17. 地下アトリエ兼住宅 Sous-Plexe

— 構造体と室内環境に基づいた平面計画 —

店舗 + 印刷所 (?) → . . . → 個人住宅 (2001)

建築家：カール＝フレデリクスベンステッド
(Carl-Fredrik Svenstedt)

工期：2001年竣工

規模：145 m²

ス・プレックスはパリ3区のサントンジュ通り (rue de Saintonge) に面した1階の店舗と地下1階の印刷所を、アトリエ兼個人住宅に転用したものである。

1階は通り側からリビング、吹抜及び階段、ダイニング・キッチン、階段及び階段、ダイニング・キッチンの3つの部分から構成されている。中心に大きな吹抜を有する階段と台形の吹抜は、地下1階の各室に自然光をもたらすと共に、室内全体の換気のためにも重要な役割を果たしている。また元々空間が連続しているため、その特徴を活かして1階の通りに面したリビングから、最奥のダイニング・キッチンまで通りから見渡せるように開放的に計画された。

地下1階は通り側からアトリエ、階段室、寝室及び浴室の順に配置され、大きな2つの吹抜のほかに、通り沿いにも小さな吹き抜けが、地下1階の浴室にも天窗がそれぞれ設けられ、地下空間の環境に最大限の配慮が取られている。インテリア全体の色調は白を基調に、紫、オレンジ、黄などの鮮やかな色がアクセントである。

斜めに区切られた平面は単にデザインによるものではなく、既存の構造体の位置と配置と地下1階の快適な採光・換気を考慮して計画されたものであり、その結果薄暗い地下1階にも快適な居住空間を確保することに成功してだけでなく、すべての室がつながった快適な住空間を成立させた。



図-3 ダイニング・リビング

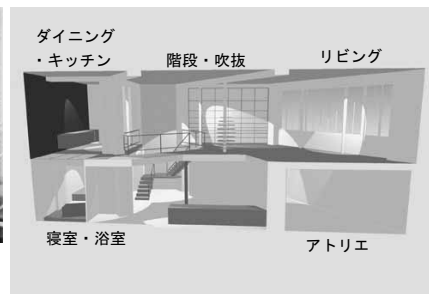


図-4 計画案



図-5 階段



図-6 配置図



図-7 1階平面図



図-8 地下1階平面図



図-1 正面



図-2 ダイニング・キッチンと階段・吹抜

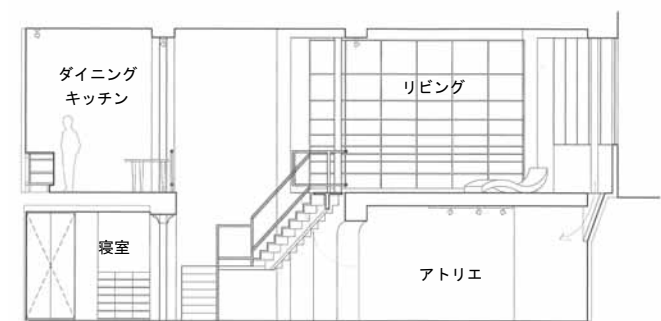


図-9 断面図

■結び

パリでは古典主義建築だけではなく近代建築も積極的に多様な改修を施され、大胆な用途の転用にも躊躇うことはない。しかし古典主義建築であろうと近代建築であろうと建築改修の基本は建築の保存であり、部分から全体に至るまでその姿勢は変わっていない。そのため改修前の建築が有する魅力は、今日も相変わらず受け継がれているのである。

しかしパリの建築改修に見られる特徴はそれだけではない。改修以前から有している建築の魅力に加えて、さらに現代建築に採用されている新たな構成手法やインテリアなどさまざまな要素を積極的に取り入れることによって、新たな建築に発展させている。これがパリの近代建築の改修の特筆すべき点である。パリの近代建築を改修することによって、新たに付加された現代建築の特徴は、次の5点の改修手法によるものである。

そのひとつは立面の操作である。フランス文化庁では金属のネットではほぼ全体を覆い、一街区を形成する一棟の建築であるかの様な演出が試みられた。またラビレット池岸の映画館では鉄骨造建築の立面と現代建築特有の立面を対比させた。この他にも AXA パリ支店などガラスのカーテンウォールによる立面の操作も見られる。こうした手法は明らかに建築本体の改修ではないが、現代建築の魅力的な要素を積極的に付加した試みである。

もうひとつは中庭の操作である。下層階の内部空間の環境改善を試みたジャン＝ポール・ゴルティエ本社屋の中庭、パサージュの上部に形成したギャルリー・コルベールの中庭、パティオを形成しつつ2棟を連結したフランス極東学院・アジア館の中庭、閉鎖的空間と外界の干渉帯に位置付けられた薬物中毒患者センター中庭はそれぞれ特有の役割を果たしているが、すべて外部空間と内部空間の一体化を試みた事例である。一方中庭に打合せスペースを設けたウィルモット・オフィス、中庭にショールームを新設したヴィトラ・ショールームでは自然採光に工夫を凝らしながら、中庭を積極的に内部空間に変更し増床に成功した事例である。

さらにスラブの挿入によって床面積の増加も今回確認された大きな建築操作の特徴である。ジャン＝ポール・ゴルティエ、スプレイ、映画館、フランス極東学院・アジア館、パサージュ、鉄道高架橋は高い天井高と地下空

間を活かして、新たな用途に適された建築である。

さらにシークエンスは空間が水平方向だけではなく垂直方向にも途切れることなく連続している状態であり、現代建築にしか見られない空間の特徴である。パサージュを取り囲む内部空間には一直線のパサージュに対照させた空間が連続する今日的なパサージュ、シークエンスが展開している。また空間の連続と共にガラスによって視覚的なシークエンスを試みたウィルモット・オフィス、大空間と小空間を組合せながらシークエンスを構成したギャルリー・ジュ・ド・ポム、2つの吹き抜けを介してすべての室を連続させたス・プレックスのように空間構成を根本的に変えてしまう試みも始まっている。

一方18事例の中には、設計者によって建築改修、用途転用よりもむしろインテリアの改修と捉えている作品もある。それだけ用途が変わることよりもむしろ既存建築を規模する用途に合わせてより快適に使えるように、より魅力的な建築に改修することに重きが置かれているからかもしれない。インテリアが重要視されている作品は、求心性のある内部空間を構成したジャン＝ポール・ゴルティエ本社、鉄のインテリアを試みたパヴィリオン・ド・ラルスナル、現代的なインテリアが挿入されたスプレイとス・プレックス、家具とインテリアを統一したプティ・パフェ・ジョンヌである。

今後の課題は事例を増加させることにある。次年度も現地調査を実施し、さらに多くの秀逸な事例を紹介すると共に、事例集のデータベースを構築するために、改修工事において実施した建築操作別に捉え直した意匠考察を展開する予定である。

註

建築図面は主要フランス建築雑誌及び現地における提供資料から引用した。ほぼすべての写真は筆者が撮影したものであるが、一部フランス建築雑誌、提供資料から引用した。

"Immeuble" は「集合住宅」と記したが、集合住宅に事務所など多様な用途に改修もしくは付加された大型の建築物を意味する。

謝辞

本現地調査ではパリ・ベルヴィル建築大学教授フィリップ・プロスト、建築家カトリーヌ・セイラー、カール＝フレデリック・スヴェンステッド、フランス建築協会 (IFA: Institute Français d'Architecture) 学芸員アレクサンドル・ラゴワ (Alexandre Ragois)、ノルヴェン・ラヌー (Nolwenn Rannou) から資料及び情報提供を受けた。記して謝意を表す。

尚、本研究は下記2点の研究費に基づく成果の一部である。科学研究費 (若手研究 B)、研究科題名:「パリにおける近代建築の改修事例に関する意匠考察と作品データベースの構築」、(課題番号: 17760515)

21世紀 COE プログラム、大学: 首都大学東京、研究科題名:「巨大都市建築ストックの賦活・更新技術育成」